WASON
HQ
1104
J74 +

no 370

女學雜誌

明治十八年初刊
每週土曜日發兌
第三百七十號

要目

春の歌　佐々木信綱
棄婦行　雲峯子
春の夕　松茶
花を送るの名殘とせん
誰か三月をのみ花の春とは言ふ
花や人間の風流を羨やむ
春の血は花にあらじ
落花片々のおもひ
花の下に醉人を説く
花を盜みて散らすものあり
花の散るに乙女の過逝くを懐ふ
橋松佳話　花圃
春の悪　大和田建樹
懷を述ぶ　乙女

明治二十七年四月廿八日發兌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百七十七號目録

社說

落花片々のおもひ

花の下に醉人を睨く
花や人間の風流を羨やむ
春の血は花にあらじ
花の散るに乙女の過ぎ逝くを惜ふ
誰か三月をのみ花の春とは言ふ
花を怨みて散らすものあり
花を遣るの名殘をせん

文藝

詩歌對吟（小楽子）
楽婦行（詩）
同じ心を（歌）
同調異義

徒然草

春の夕（其二）（松系）
懐を述ぶ（乙女）

雜錄

歌のこゑ〳〵
歡迎の歌（無名子）
卒業式の歌（大和田建樹）
卒業の歌（同人）
送別の歌（同人）
作の歌（佐々木信綱）
春のめぐみ（大和田建樹）
失愛犬記（米愛水）

小說

悟校作品（花圃女史）
二　同
山のわた橋

片々

學問の打破
小學校の洗滌學科

時報

明治女學校の卒業式○京都府高等女學校○照暗女學校の合併○華族女學校幼稚園の開園○島海女學校○師範學校女子部の在籍○私立裁縫校設置○神戸女子傳道學校○關西女子教育會略況○廣島英和女學校○第二回女子夏期學校○前橋の有志者○王子孤女學院の困難○淺井作女史○茂野吟子○ウヰバン、エバンゼリスト○南部讃愛女學校○女子高等師範學校規定○女教師の再來○發明家の刻苦其女を活んとす○女子の相續に就て○鳥取師範學校生徒の食事○日本小兒教育研究會○眞宗婦人教會一周年會○松山婦人會○高月婦人協會○矯風會○孤兒の友○正誤

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第三百七十七號
明治二十七年四月廿八日發兌

社説

落花片々のおもひ

○花の下に醉人を説く

花をかざして醉ひて蹌踉たる男子よ。汝も亦た家に妻子はあるべし。室家團欒をうるほすべき餘財は、汝ひとり之を飲みて盡さんとするか。汝、心を放つて醉歌高吟するとき、愛すべきの稚兒は亦た樂しむとを得るか。落花、なさけに恨みて汝が無情の身のまわりに散らんとす、妻孥あに亦た遺憾なしとせんや。あわれむべし、酩酊の壯男子。歩むと病めるが如く、叫ぶと狂へるに似たり。汝こと〳〵く其の愛妻愛子を忘れたりや。われ其の癡態を見て涙、こゝろに滿ち、ひそかにそが家人におもひを遣りて同情のうれひ禁じがたし。汝が、最とも快樂を極めたりとするの時は、則はち家人が最とも痛苦なりとするの時にはあらずや。汝、憂愁を拂ふごとに、家人は、憂愁を加はふ。家に溝壑に轉ろぶの人を想ひ、聲に路上に爭そふの音を氣遣ふ。醉狂の良人をもてる妻が心こそ痛ましけれ。若し今ま些との本性倘ほ覺めて在らば、語ばを寄せて一言す汝ぢ酩酊の男子よ。われは必らずしも偏理一片の究窟なる禁酒論をもて汝を規せず、たゞ情に覺り心に聽きて、少こしく人のなさけを念ぜよと勸む。吁、こゝろなき花のほとりの狂へる人、何んぞ杯を破つて、早く、家づとを包むの用意をせざる。

○花や人間の風流を羨やむ

花の艶なるを觀て、花に勞苦なしと言ふか。花豈に心なくして開かんや。其の色は胡蝶を招かんとてなり、其姿は蜂腰にあわせんとてなり。花の散るをながめて、落花を益なしと言

ふか。花豈に功なくして落んや。其散るは、果實を熟せんとてなり、其落るは地を肥さんとて也。心せよ、花邊に田圃を望むの遊客。遙かに野人が泥土を耕やすを見て、歎じて曰く、樂しき哉、農人、ひねもす此の花の下に務を盡し、又、此の花の散れるが間だを歸く、朴直閑雅、何等の風流ぞや、人生花邊の農耕を爲すに若くものあらじと。左れど、彼れ農人豈に花々樂しむの餘裕あらんや。三月、麥圃の事正に忙はしく、四月、蠶子すでに卵を破る。唯り妻の春を慶するは、衣のうすくして足れるを以てのみ、只た見聲の爲めに浮こぶは、自然の恩物、樹上途上に満つるの故のみ。農人豈に此の外に春のたのしみあらんや。詩人歌ふらく、嗟爾ち蛺蝶猶り俗意、飛來り飛去り嫌猜なし、農家農家樂しみ復た樂しむ、市朝爭奪の惡きに比せずと。然りと雖ども、かくの如き樂觀はたゞ觀る人に於ての感のみ、當路者豈に此の餘裕あらんや。蓋し、人は、我が現在の事情をもて最とも困難なりとし、他者の勤勞をながめて至樂なりとするもの也。惜しむべし、漁夫一詩を賦せずと、左れど此時漁夫豈に詩を賦するの樂しみあらんや。まさに佇立傍觀するの人を顧りみて其の悠々たるを羨まんずらん。花邊の農夫、堤上の遊客を瞥見して嗟歎すらく、あゝ己れそも何の日にか花を觀るの身分となるかと。花や開き又落ちて獨り語るらく、何んぞ人間の餘裕多きや、吾輩の勤勞をながめて歌を詠じ、吾儕の榮枯盛衰を弄そびて酒に醉ふとを爲すと。夫れ、人は此の如く我儘なるもの也。もし人あつて自己が現狀を恨むとあらば、試みに去つて而して遠く己が立てりし地位を瞥見すべし。何んぞ其の風流にして而して悠々たるや。詩人あり、其茅舍のむさくろしきに堪へず、俄かに出でて去ると十數町、則はち顧りみて吾廬を望めば、茅檐煙を吐くの所ろ、何等の雅趣ぞや、戀々として望んで立てば、既にして日落ち暗燈、破障に映ずるを見るに、あゝ是れ何等の風流ぞ、正に詩仙恰好の題料なりき。夫れ遙かに望むものの美なると、大概ね斯の如し。

〇春の血は花にあらじ

啼鳥紛々春二月、天涯魂魄不歸人。朝鮮の花、五根頭陀古筠は失ぬ。不知何處埋殘骨、空對春風感涙多。北越の名士、頭を斬つて血を流せり。花は、春の血なるか、血は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

人の花なるか。人の花は武士なり、花の花は櫻なり。何等の恨みぞ、春光あたたかき頃ほひ、切りに人の血を見るとや。然りと雖ども、殺人の罪、多くは年少の人にあり。而して、其罪や、ことに春に於てせられ、其罪の起る、亦た春のこゝろよりするを以て最多となす。血の激する所ろ、血を見ざれば止まず、之を春の狂ひとは云ふ。たゞ彼の冷々たる寒心の徒、氷室に刄を藏し、冬天に鞘を拂ふ、寒月の下た破顔一笑して而して冷かに人を殺すものこそ、更に尙ほ恐しけれ。

○花の散るに乙女の過ぎ逝くを懷ふ

十三四、淡雅無邪氣にして而も姿の自づからに優しき乙女は、山櫻に似たる哉。豐艶の色うるはしく、にほひ眞とに濃やかなる淑女は、八重櫻にたとへん。濃淡の色の姿あひ異なると雖ども、ひとしく花なり。花や、一樹の春、春のながめ、一代の美麗これに及くとなきか。陽氣自づからにして來り、春のこゝち乙女が胸のとざしを開けば、奇しき温光そが衷心に徹して全景こゝに一變す。うすくれなゐは、優恥をしめし、全盛は、よそほひに象どる。乙女、心にかへり見て、一種異樣の新らしき感あるべし。これ方さに熟期、女性はじめて色を染めたるの時なりとす。人たれか詩情なからん、此の時の楚々たる姿、切に情を動かすべし。人たれか戀美の懷ひなからん、此の頃の艶なる色、ふかく情けにしまん。眞とに春は淑女が一生の盛期なる哉。左れば見よ、此の花いつまでかさかり、此の春いつまでか續く、陽春乍まち逝き、花や忽然として落つ。彼の豐艶濃色の乙女、嫁ぎて未だ一歲ならず、姿すでに衰ろふ。何んぞ其のよそほひの脆きと斯の如く甚しきや。色に愛で、戀愛にこがるるものは、常に此の聖なる敎へに聽くべし。

○誰か三月をのみ花の春とは言ふ

幼けなくして、人は親を慕ふ是れ愛のはじめなり。齡ひ熟して、人は男女あひ慕ふ、これ戀のはじめなり。戀は、即はち愛に色あるもの、人生の大道ラーブ、ロゴスの一端なりとす。人の幼なるや、之に慈くしみを添えざれば、懷くとを知らず、愛の極めて稚きものなり。年華ひらき血色まさに昌んにして、情念勃々たるときや、之れに色をしめし、之れに美を加へ、

之に好箇の料を添えざれば、戀ひするとなし、愛の徊は至らざるものなり。然りと雖ども、人もし五十歩を踏まざれば、何を以てか能く百歩に達せん。百歩をもて五十歩に等しと言ふものは、未だ發達の妙を味わざるもの歟。此の故に、戀愛は、或る時限の福音なり。年少の男女、大方は一と度び此の境ひを過ぎ、冷寒の胸、春をきざして俄然として變ず。我なるものを知り初むるも此時なり、人なるものを知り初むるも此時なり、世と云へる不思儀なる巨人の肉腐に直接するも此時を初めとし、悲哀歡樂の眞の粋を味はふも此時を初めとす。利己卑醜の氣、此時より脱し、鄙野陋劣の態、此の時より更まる。人、戀愛を知るの時機は、極めて大切の時機なりとす。然りと雖ども、戀愛の望み正に達し、陰陽の氣快ちよく合し、兩々遥かに相慕ふことを須ひずして、既に近く相交わるの時に至ては、戀愛なるものゝ味は、曾て理想し又常に夢想したるものと相差ふの事を感ずべし。或る心地より言はんには、戀愛の蜃氣樓は近づくまゝに消たりとこそ恨むべけれ。恒に久しくうひ／＼しき若れの戀を覺うるものはあらじとぞ見ゆ。こゝを以て、妻を定めざる法師、

四 妻を得ざる獨棲の人、もしくは斷えず新妻をあさるたわれ男もしくは、到る所ろ美人を感ずるポエトのともがらにあらずば、終世、年少の戀愛を懷ふとはあらず。左れば戀愛は、孝懷につぐの愛のしめし、人生一期の春の花なる哉。花落ちて、青葉しげり、青葉ちりて亦た果あり。一代は、一代を送迎して、各々これに色あり。色々のラーブ、つぎ／＼に姿を示めし、則はちロゴスの全姿を顯現せんとを欲す。人はまさに躍路をたどりて大道を進むべき也耳。もし矯激者ありて、天地を罵らば、天地、人を斉ふぞ言はんか、彼は手を打つて玆までお出でと歌ひ、到れば則はち其樂みを全碎す。これ、人生に執着ありて、而して執着の后に失望あり、失望ありて而して后に悟達あり、悟達やうやく人を完くするの所以なるか。人もし斯の如くにして進まば、遂に到る所ろに親あり、到る所ろに戀人あらん。大主、万衆を指ざして曰ひ玉ふらく、これ吾が兄弟にあらずや、これ吾が母にあらずや、汝、その敵をすら愛すべしと。人もし玆に至らば、敵に戀ひし、他し人にも懷くとあらんとすらん。戀愛の秘義や洪大奧妙なり。花散る后ちの望み徊は悠々たり。誰か三月そのみ春とは云ふ。春

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すぎて夏來り、夏ゆきて秋來る、而も、心ある人の胸のうちには、つねに春ありと知らずや。

○花を盗みて散らすものあり

可レ惜落花君莫レ掃。散りし名殘りを掻き集めて花紋の錦を剝ぎ取らんとするものは、更めて言ふとを要ひず。近き頃ろ夜深けて三更の月に歩み、靜かに八重の最期を惜しみつゝ折ふし、何ものにやある、櫻の枝にすがりて伐らんとするものあり。盗人も、花をぬすむと聞けば、坐ろに床しき心地のするものを、今ま此の月光にうつろふを見とれて、意はずも情操の愛慕禁じがたく、則はちひそかに此の盗みを爲すよと念われたるに、后にて聞けば、左にはあらざりき。これ實に近きほとりの貧人が、伐つて薪の料にするものなりとぞ。嗚呼、貧賤の人を賊するや斯の如し。何んぞ風流の淺深をもて評すべきの境界ならんや。

○花を送るの名殘とせん

花は散りぬ、年の春は了んぬ。いざ是より忙わしき家の雜務につとめんと言ふものは、共に花を賞觀したる樂しき家人の警戒なるべし。共に花を待ち、又共に花をながめ、又々共に花の落るを送る。斯の如き同心同緣の人こそ床しけれ。われことし樹梢の花を見しと少なし、然れども眞とに天地の花を見たると、今年の如く多きはあらず。今や、花散りて樹梢はなはださびしきに似たれど、わが思ひ尙ほ春思をのこして、花の姿きゆる時あらず。むかし程氏兄弟、觀花を論ず、われは寧ろ明道の厚博にくみせん哉。春にあひて花を見ざるは惜しむべし。花を見て花を念わざるは淺し。花を散らせて而してともに花を失ふは至らずと言わん。然れども、こゝに年の春大方たに過ぎ、樹梢の花全く散りぬ。則はち落花の懷ひ片々をかきのこして、今年の花を送るの名殘とす。

五　月

三十日（明治九年）皇子女御降誕の時は自今宣下に及ばず親王内親王と稱す。

卅一日（明治六年）婦女にて一家相續の者は自印を用ひしむ。

府　下

藤　（龜井戶、大塚傳妙院、目黑、上野、淺草、佃島住吉、木母寺）。

牡丹（團子坂、駒込、本所草文、寺島、奥山、笑花園、靖國、丸山、目黑、染井、傳中、目白牡丹園。）

芍藥（本所偕工園、寺島）

躑躅（靖國、染井、日暮里、大久保、根津、護國寺）。

文藝

詩歌對吟

雲巖子

吾郷の舊友某、一日、其作る所の詩、棄婦行を寄せらる。即ち其意を移して國語となし、以て返詩とす。詩に曰く。

棄婦行

妾與良人有良媒。一夜合巹意氣閒。
千秋萬古何所聞。一雙仙鶴上蓬萊。
看花賞月又對雪。良人愛妾情轉切。
妾顏縱無比月花。妾心如雪節尚高。
妾非巧言令色人。妾聞情花是情[illegible]。
夙夜勤勉理家事。欲迎和氣[illegible]。
雖奈人情翻覆手。一朝來折來[illegible]。
無情棄妾瓦礫同。妾非瓦礫是貞婦。
嗚呼數奇如此可憐生。良人無復存舊情。
一夜故山思往事。枕頭滿灑涙有痕。

同じ心を

一　つらなるえだの　へだてなき、
　　えにしちぎれる　なかなれば、
　　こゝろのどかに　うちとけて、
　　たのしきゆめも　むすびけり。
　　つがひはなれぬ　わしたつの、
　　そこよにあそぶ　こゝちして、
　　よろづよまでも　あだしよの、
　　あだなるさちを　のぞみきや。

二　花さくあした　つきのゆふべ、
　　ゆきのながめの　たゞなる日、
　　ふかきなさけの　ことのはに、
　　つゆのいのちを　おきてけり。
　　はなのかんばせ　つきのまゆ、
　　わが身のうへは　よそはねど、
　　けがれにそまぬ　しらゆきの、
　　きよきこゝろは　ありけるを。

三　うつろひやすき　ことのはの、
　　あだなるいろは　よそにみつ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ゆきにうもれて　さくうめの、
　はなのみさをゝ　しをりにて、
あしたのつゆを　そてにうけ、
　ゆうべのしもを　身にしめて、
やかてのとかに　さく花の、
　はるにあはんと　おもひしを。

四

さだめなき世の　さま見せて、
　ゆくえもしらず　ふくかぜに、
なびきはてたる　いとやなき、
　むすべるゑにし　たえはてゝ、
なみにまかする　ふねのごと、
　よるべなき身と　なりにけり。
いろかゆかしく　さくうめに、
　たぐふわれとも　おもひしを。

五

あはれさちなき　身のうへの、
　なれるはてこそ　かなしけれ、
かはりはてたる　ひとこゝろ、
　むかしになさん　よしもなし。

かくふるさとに　ありし日を、
　しのぶとすれは　小夜ふかみ、
ゆめもむすばぬ　まくらべに、
　むすぶ涙の　つゆしげし。

同訓異義（續）

ナ

ナロフ

- 效　それをかたにしてまねをしてゆく事
- 倣　效同
- 習　君子是則是傚ふ所の業をいくたびもしてそのあんばいを手にいれる事
- 擬　それに合せてにせる氣味はかりてうかゞひする事
- 放　それにもたれよる氣味
- 學　古人のするさころをその身にけいこする事
- 慣　しなれて自由のつく事
- 狃　いつまでも此通りさ思てをる事

ナゲク

- 嘆　ためいきつく事　讃美にも憂愁にも用
- 咨　嗟同　なげく事
- 慨　その事を心にさめてなけく事
- 嗟　言足らずして聲を發して其意をつくす事　かなしみなけく事
- 哭　(嗟参照)
- 慟　つよくかなしみて氣をさりうしなふ事

ナク

- 泣　心に憂あればなぼへずなみだの落る事
- 鳴　内にもちたる聲のはづみて外に出る事
- 號　聲をあげてさけびなく事

ナンヂ

- 爾　人を指て云事　その方さ云氣味
- 若　そちそこもささ云氣味
- 汝　衆中においてその人をさして其方さ云こゝろ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つれづれ草

春の夕

其二　　松茶

むかしは美いの、二三人もつれて、摘草もさして見た私、さても世が世であるなれば、と愚痴も鼻唄とゝろ仙吉を相手に、一我は賤のものを賞して、客は黄に咲く菜種の花をかしと、一望平野のうちに眺めて、うかれゆく十里の長堤、いつの間にやら通りこして、こゝ古[illegible]河とて主もすむべき眺めのふる沼、今は岸の柳の、みどりの糸たれて、いつぞや見し身投げの女の事も想はず、さてはあぶなきかげ伝ひに、雲さへ暗き樹下をぬけて、漸く雑木の森影にいづれば、そこに白く咲けるさぎ草をかしと、仙吉ひとりうれしがるに、客も蹈らしどや一輪をつみけり。

かへて畠を過ぎ、屋敷をぬけて、一本松の傍のもとより、はるかに見ゆる流れを追ふて、腰のものを早やからになしつ、

つきしは江上の一破屋、空はくもるともなくかきくれて、荒川の水も柳もほの暗く、我もほろ酔ひにたゞよふて、笠虎うちかとおとなひける。

懷を述ぶ

乙女

日は入りぬ空のけしき見るがうちに變り行き煌めく星時を得がほに咲きぬ花に聲なき夕暮の空あはれにいとゞもの悲し月は出ぬ星は光をうしなひぬ杜鵑の一聲心にひゞく。

七そぢ足らぬ今生の短き浮世に廿とせ餘りの春秋におひて五とせ六とせ此かた文の林に分け入ぬ人のすなると我もして見んと心赴くまゝに杖ひきぬ或時は月にあくがれて、家路忘れ或時は野にさすらひて天地を此處にかぎり或時は海に棹さしてはてしなき海原を望みいづれのきしにたゞよはんも知らず今日此頃となりて顧へばたゞ淺井の底の蛙蛤に海水をはかるたぐひにもことならじ山家に隣を遠くのぞみては都の空に並ぶ燦花の浮羅陀にむれつどふ人々の浮なるに驚き更に地圖に我國を見てつど國の廣きを想ひさらにまた限りなき宇宙を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

思ひて身の小なるを知る省みて負へるの務重くして身にもてるは沖にあさりてまさごの二ッ三ッ手にしたるだにも及ばじ見出したるはおそろしきうき世にまたれたる我のみ。

つく〴〵と學びのまどにさしのぞく月にうき世の態を窺へば人間萬事定めなく世は文明といひ開化とさけぶとも鳥部野の煙絶ゆる期なく士君子いたづらに苦吟す行く河の流れに無常を觀ぜしめたる昔しにことなるなく夕部に死して朝に生るゝならひ夜半の嵐に散る花は露霜を凌ぎてまたこん春にめぐり逢ふこともあらんはかなきは人の上にぞありける生れてすぐれたる人も世の上に出んことかたく多くは世といふものに愚弄せられてむなしく一生を送る世に從へば心苦しく世にそむけば狂へるに似たりあゝ世は人を心のまゝに愚弄して荒波にかぢをたへしめ思はぬきしにからく吹よせて堪へぬ苦悶に恨みをのみ涙のかはくひまさへあらせず無慘なるは世にこそありけるかゝる世にもたゞ愛のきづなとげがたき望にあざむかれて生きかぎりなきの境を得んとたゝかふに似たりまてといふに散らでとゞまるものならば花に思ひますことなく花はもろきに惜まれ月は雲かくれにあはれふかし青葉にむかしゆかしみ雨雲にはれまを望めばこそ色まさり光りはそふめれ無常迅速なるによりて限りなきの境をさぐらんとの志を起さしめ無慘なるによりて自らを立たしむ懷へば世の苦しみは意味なく益なきのしもとにはあらじ世の無常もなく無慘もなくもあらば人に心もなからまし水は流れざるに虫生じ人は變化なきに心かる定めなきをいみじと云ひけんも意ふかしや。

目を擧ぐれば森羅万象は歌へよさとれよとうながすなる心して見れば野花一輪にも深きみ業をあらはし草葉にすだく虫もそれ〴〵の運命をそのふまどうち明けて色深き春の姿をながむれば柳櫻をこきまぜたるほとり百鳥のさへずるうちに限りなきの春をたづねまどふかくとざして書をひもとけばまだ見ぬ國も心のまなこにうつし達觀のしきに造化の大能をうかゞふ身いと小さしとも心をこむれば悠々たる天地も居ながらにして味ひ得るごとしされどまなこをさらして得たるよりも心にふるゝものゝ身にとゞまるはいと深し自然の美を心のうちにやどすも古人の胸中を窺ふも身一度これにあたらざれば其心宮の糸に達し得ず人生のふかき奥を知らんと思へば深く人生に入りてこそ一步は一步の新けしきをも見得なん步まされ

ば幽邃の境をもさぐる能はず身は世の外にありてたゞきのふ知り得ざる味ひ今日知ると思へばこん幾とし月の間世にさすらひて如何なるけしきにあはんとすらむ。星うつり世變るとも日の下に一つの新しきものなく造化の御目よりは千年も一日の如くまた夜の間の一時にことならず世はたまきのはしの限りなく行にもならず歸るにもあらずたゞ見る人の心にまかせおける高根の月にもたとふべきか哲學新たに起り宗教改るとも其物にはあらで只客觀の變りゆくにこそ道は太初にあり學べばいよ〳〵深く究むればいよ〳〵ひろく味へばいよ〳〵妙なりはてなきに其時天地にひゞき渡る其御聲こそしるべなりけるいざやリヤルの世にリヤルの身を託して世のにへとなし心は別に限りなきのさかひにまだ見ぬ花をたづね流轉きはめなきの間人生の深き奥をさぐらんか。夜は深ふして月傾き万籟やむのまたゝき間もなく際もなく人もなしたゞ宇宙万有にみち溢れる神と我とのみ。

月上忽チ梅影出ヽ

風高耳邊ニ雁聲過ニ

雜録

歌のこゑ〴〵

左の諸曲は去る日明治女學校の卒業式にてうたはれしものなり。

歡迎の歌　　無名子

開けよや森のをちこちに。ひゞく小鳥の歌聲を。嬉しきしらべ樂しき音。友を迎へて喜びの。心や外にあふるらん。來れや來れいざ友よ。我もうたはんもろともに。

卒業式の歌　　大和田建樹

（一）朝にまなびし道しばも。夕に習ひし言の葉も。雪と螢のひかりにて。輝くけふのむしろかな。

（二）花のさかりをよそになし。月のまどひをうとみつゝ。つとめいそしむ春秋の。月日ぞ文のひかりなる。

卒業の歌　　大和田建樹

（一）けふわがわざを終りしは。たゞ師のめぐみ親の恩。開くる御代の嬉しさをうたひて謝せん諸共に。

（二）努むる心弛まずば。世に何事かならざらん。かくまで教へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

導きたてし。わが師の恩を今ぞ知る。
(三)知識の海は底深し。社會の山は道けはし。是まで受けしその教をぞ。揖とも賴み杖とせん。

送別の歌　大和田建樹

(一)へたてぬ谷間に。育ちし杜鵑。あすより別れん。峯に野邊に。
(合唱)忘るなけふまで。住みつる山かげを。
(二)羽ねうちかわして。きのふは諸共に。遊びし谷間を。けふは出づる。
(合唱)名のれや初音を。雲井のそら高く。

春の歌　佐々木信綱

(一)雲雀なき。こてふ舞ひ。たのしきは。春の日よ。ゆかしきは。春の日よ。たのしゆかし。春の日。あをやぎ。綠にもえて。うぐひす。聲のどかに。山べも野べも。霞むなり。いざや友。打つれつゝ。すみれの床に。まとゐして。春の歌。いざうたはむ。いざ〳〵わが友。いざ〳〵。うたはむ。うたはむ。うたはむ。
(二)椿ちる。谷間にも。若鮎とぶ。川瀬にも。若めかる。海邊にも。春の光。あまねし。春かぜ。ゆたかにふきて。春さめ。音しづかに。樂しき時よ。春はしる。をさまれる。世にうまれて。朝日ににほふ。山ざくら。をりかざす。このたのしさ。あゝあゝ。たのしや。あゝあゝ。たのしや。たのしや。たのしや。

春のめぐみ　大和田建樹

(一)ふけや春の風はなにくさに。かすむゆふぐれの森に野べに。あはれしづかなる空のけしき。いざやうちつれてなれもうたへ。春のいろふかき山よ川よ
(二)ゆけや春の水くさのかげに。つぼみうちなびく花のしたに。あはれおもしろきのべのけしき。神は人のため愛のうたを。高くうたひつ今ぞこゝに

失愛犬記　米愛水

今年一月の末つ頃人より、生れて廿日ばかりなる洋種の雄犬貰ひ受ぬ、白と黒との斑紋にて耳ふさやかに垂れ心地よく肥太りていとかはゆげなり、己れ蜜柑の古箱とり出て、假りの小屋しつらひぬれど、餘り少さくていぢらしければ、祖母上に乞ひて四五日ばかりは、炬燵の邊りにをく事を許されぬ、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

人々皆憐れがりて、嚙みとなしたる菓子など與へつ、よき名付てんと云ひ合へりしを、集ひ玉へる客人の中に巖本主、外國に、ジヤンボー、となん呼べる犬の、恩に酬ひたりと云ふことのあれば、其名を負はせばやとて、やがてジヤンボー、と付け玉ひしを、只閑々と呼びなせり。

夜に入れば、親猫を戀ひ慕ひ猜きさけぶさまの哀れなれば、人々交る〳〵起きて背を撫ぜ、もの與へなどして眠らせつ、後には能く馴れ親みて、人々につきまとひ、庭下駄咬へ、或は鉢の木引ぬき、或は己が敷物を咬へ廻はり、日あたりよき所にて快よげに打まろびなどして、餘念なきさま云はん方なくあひらし、此様上の徒然常に、お手、お廻り、お預け、など授け玉ひしに、性質賢くてさかしければ、一月ばかりにて覺え了りぬ、此頃は遠く投げし物を見事に受取、銜持ち運びなどするに至りしかば、今は第一等に進したりき。

己れは常に朝寢の癖ありしかど、彼を飼ひてより以來は、よき目醒の友得たる心地して、いつも疾く起き出でて、彼れを引つれ、招魂社内をそゞろあるきするを樂みとはしぬ、朝に架に憩ひて新聞紙讀む間は、彼れは少しも我傍を離れず、讀み了しをば必ず持ち歸へるをもて、蘭は大ひなる務となせるが如し、又己れ車にて他行する時は、彼は先きにたちて同じく乘る事を得意とせり、かく彼れは己れを慕ひ、己れ又子の如くに愛しぬ。

過ぎにし十四日の日彼れの頸輪に、我家の名彫付けんとてはずし、三時ばかりは門の戸閉じて出さぬやう人々に云ひおきしかど、いつくよりか出でけん、聞くも忌はしき屠牢の手に陷れぬと告ぐる人あり、己れ手にせし書籍擲げすて、いかにもしてとりかへさんとて、其跡逐ひしかど、半時ばかり經て後なれば、口おしくも遂ひに見失ひぬ、巡査に尋ぬるに、彼れは警察署に許を乞はんとする途なるべければ、本署に到れよと云ふ、聞くもそこ〳〵馳せ行きて、其ことを訴へしに、署長は我れを慰さめて、札の付かざりしは返す〳〵も欠點なれど、巡査の付添ひなきは私事なり、君彼を求めそを詰問して捕へたりなば、其處分はすべしされど時すぎたれば、迚ても大概生せんことは覺束なからんと云ひぬ、己れせめては屠牢奴を捕へ屍なりとも取り返へさんとて、處々に人を馳せしかど、今は漸々日落ちて更に行衞を知らず、悄然として歸

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

へりぬ、あたりの人々も痛く氣毒がりぬ。
家の內大ひに氣澄はてゝ、只さへ淚もろき祖母上は打しめり玉ひて、彼の淋しかりしとき手招きして我を呼びたりとの事もの養る時彼の乞ひて止まざりし事など語り玉ひ、ともに喞ひおける佛蘭狗すら心に感じたりしけん、頻りに蘭の寢處など見廻りて、打しほれたる友愛情見るに忍びずとて、父上は平常好み玉へる書にも心よらずと筆さし擱き、あはれがり玉ひぬ。

孔夫子の犬死し子貢に命じて葬らせ玉ひしとき、我弊帷は棄ずと嘆たれしも、陸机の愛犬黃耳死にしとき棄つるに忍びずとて、之れを殯して黃耳塚と呼びしも、英雄韓信の如きすら、死にのぞみて愛犬と狩すること出來ずとてなげきしも、皆其情に忍びざるものありてならん、まして己の愛犬は死躰すら奪ひ去られて殘れるは只頸輪のみ、悲恨實に無量なりき。

小狗名蘭尨。門戶常防守。一朝有人呼。狗斃屠宰手。
投書起出門。屠宰已遯走。惆悵又忿怒。爲汝捕欲毆。
蘭尨兮蘭尨。我雖非富有。筵席與弊帷。當不陷汝首。
恰似薄命人。子死存老母。解釋具個情。孰與喪家狗。

蘭死にて後招魂社に到りけるとき
櫻さく木ずゑにうとふ鶯の
聲をきゝてもたのしまぬか那
あはれ彼が魂、いづちをか、さまよふらん。

甲午清和しるす。

小說

橋松佳話

二回　花園女史

山のわた橋

旅といへば、うきものとおもふは、草枕の昔、橋本開明の世に生れあひ、物見遊山ならねど、心に勇みあれば、みるものきくものおもしろく、滊車の運轉まだるつこく、心せきて、過去現在未來とかはる〳〵思ひをはしらするうち、國府津につきぬ。こゝに待受たる鐵道馬車に飛乘て。萬感交〻臻る小田原の町、見しれる人に顏見らるゝをはづかしと思ふ身の上へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ならねど、何となく氣おくれして、うつむきがちなるにコトと馬車は止まりぬ。乘合まつまの久しきに、おもはずそこらを見まわせば、目の前にさかなの荷をかつぎてはしるは、わが世になり出しなかたちの魚屋の息子、かの月夜に、われに非道なることといひかけ、はてはかなはず逃出せし男、今は分別さかりと見ゆる年頃にはなりたれど、かはらぬはつゝ袖になりはひの姿、われも見出す人なくば、かく朽しやもはかられぬ身なりしと、今更にかの夜の那松田侯爵のこと、おもひ出され、かの人に對しても、なすこともなくてやほと腕とりしばる、折しもまた、ゆれいだす馬車、はや町をはなれて、沿側に枝をかはせし松並木、ア、見事なる立木かな、かゝる木材きり出して、かねて人にもきゝ、又われもそれと決心せし、清國との貿易、その昔紀文の富もこれよりこそ開け、われ無資に、金むさぼる心なければ、一人の富は一國の富なり、それとおもひさだめし事、どこまでもし通して、わたるにまかせ、やつて見ん、大小はあれ、一心一到さ、東京にははなれ小田原にもはなるゝとゝもに、滿車の中の人、皆松杉竹さま〴〵の大木とめの前に現じ、早川の流は丁々ときる斧の響きときこえぬ。

茫然としたりしが、又うち笑てあなたに望む箱根山、皆はげ山のやうなるを笑止に見なしつゝ、そのあたりより車にのりかへて宿る、熱海の温泉宿、あつさに寢ぐるしき、夢も又、山林にかけまわりぬ。翌日はおもひつきしよりこの年月これのみに盡くせし精神、今緒を得て、飛て行もたらねど、これより車もからず、わらぢはきて、網代道をとり、湯川へ出、漫々たる海面のけしき、日の上るあたりに心ぼそげに、うかぶ大島、かけわし少しとゞめて、おもひおもふ、わが幼きむかし、海邊に、あのことを箱か根に、あみ引、漁船にのりし事いさゝかの覺われど、おもひ出でんも、おぼえなき、父母はいかに、我身の生立はいかに、橋本の姓も、八丈島よりつれきしにいふ高次の姓をそのまゝ、誰もたれ名つけゝん、おもへばかなしきありさまかなと、おもはずイしが、いな、今泣も忘るゝ心なけれど、おもひしのひ來りし古郷の事、めの前にひかゆる目的あるに、何又こゝにめゝしくもおもひ出はかなき事をくりかへすとぞと、わらじ引しめて、みかへりもせず、和田大川、外浦、白濱、と夜は泊を逝く、朝は早立に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

して、さして行伊豆の國天城山の麓村、さゝ竹の垣、あみ目こまかくひき廻してひろき一搆、門の横手に水門ありて、水車の響もきこえ、納屋に米つくか、杵の音せはしく、鷄數十羽、門の内外に虫ひらふ中に鳩もまじりて見ゆる門、なれぬ土地とて幾度も、おくれし田の艸とる男に道きゝて、指さゝれしをあてに、立よれば、田舍に似合ず、門札うつて、今村仙右衛門とよまれたり。」

橋本これとうなづきて、蝙蝠傘つぼめヅカ〳〵と玄關へさしかかりて、たのむといふ聲、きゝつけ、ヤどうして來たとうら口より飛出せしは今村久也。學校にありし時より見覺えある蚊かすりの單衣きて、いままで何をしてか、尻ひきかゝげゐしが、人手をからず、自分からわしそゝきの水、垣根のむかふの井戸にくむやら、ちりはたくやら、手をとらぬばかりにして、自分の部屋へいざなふ、部屋にはさすが机おきて、近刊の學藝雜誌をひろげ、二三の新聞紙、とりみだして、床の間めきたるところに、裱裝の天地に、やゝ虫ばみある一行物かけたり。」

そこらまめ〳〵しくとりかたづけ 久「どうして來た、君は退

學したさうだ子、とう〳〵、マアまつて居給へ、茶をもつて來る、田舍ア氷といふものが、不自由だから、こまる、あつかつたろう、團扇であふいでそこらへねころんで、肌をぬぎ給へ、と自身はあはたゞしく立て行。これぞといふ方はなけれど、正直にまめやかなる性質、同窓のものにも類なしと少し生意氣なるは勝氣の橋本の氣にかなはず、鈍なるは少しもかゝりあはぬ中にこの男、一人はこなたからもしたはれるが多き中の親友、と心ゆるして交はれば、旅の空によその家、訪ひしてゝちもせず、棒のやうになりしくたびれ足、ズツと立てあたりをみれば、內藏屋根の上にそびえて、壁土のいろ白く、あざやかに、二とまへ、そのむかふこそ天城山の、折しも夏の鬱葱と綠色こく、見るかぎり大木の生しげりたるも、うれしく、そなたを見れば、眼界ひろき田畑、これがこの家の所有か、とおどろかれぬるあなたに、なほ外藏三ツ、下納戸幾棟建つらねたり。珍しき客人とおもふてか、此方を見る餘多の男女は小作人か、めしつかひか、みな訝しげにはたらきゐたり、「またせた、今みんなしことに出で、湯がわいてゐなかつたもんだから、といひながら、茶盆へそれ〳〵とりそろへ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

片手の器には實入また少しはやけれとわせの揃そらまめをもりたり。」

これを眞中におきて、主人先横になれば、橋本も足ふみのばして、ひるからかはきたる口に、茶三四杯のみほして、そら豆かみながら「君の内でこの春天城山の拂下ヶを願つたといふとをきいたがうまくいつたか」「うまくいつた」「さうしてその木はどうする積た」「どうといつてマア下田から艀積にして深川の方へやるのだ、さうだかまだ手はつけない」「大木かあるかネ」

「ウム大木斗だ、どうも、なんだ、うちなんぞは百姓斗してゐたから、材木の事にやアなれないがすゝめる人があつて、やつたことで、はじめからかうといふ目あてがあつたわけでもない、マア儲かる筋へむけるといふ考へだ」「僕は其事で來たんだが、その木材を一つ海外へ出すつもりはないだらうか、

尤君は一切家の事にやア取合ないといふから、なんだが、僕大人は氣はなからうか、實は學校に居た時分、前途の目的をきかれた時、咄さなかつたけれど、全體、志す處は日清間の貿易だ、今迄いりこ、干鮑昆布、鱶ひれ、隨分と輸出もあるが、材木の事は目をつけた人がない、でもないが、着手するものがいまだにない、其上輸出とはいふものゝ、直輸出といふのはまれだ、大概は在留の支那人の手でやつてゐるので、己の實で、人にまうけさしてやるやうなことで、こんな馬鹿氣たはなしはない、畢竟は資本がたらないといふでもあらうが、それよりは精神がたりない、いはゞ根かつゝかないからだ、僕もこれまでいろ／＼としらべて見たが、どうしても非常な利益がある、この利益を自分の手にとる、即我邦人の手にとるといふもので、我邦を利するの第一じやないか、それで僕は一番、こゝでその木材輸出をやつて見る考だが、君も知つてゐる通りの僕だから、相談相手になるものがない、ところで君の内でかう／＼といふ咄しをきいて斷然、着手する積りで相談に來たが、一ッ共に力を併せてもらひたいといつか橋本も坐を正せば、今村も坐して膝を組「あんまり意外のはなしで、僕にやア俄に判斷も出來ない、全體君は妙な思付をしたものだ、君が修めた學術に無關係のことじやないか「さうす、マア、無關係といへば無關係だが、君は學問の應用といふことをしらない、歴史を調べるといつたつて、むかしの人がいつうまれて、いつ死んで、いくら生てゐたなんぞそらんじたつ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

た、何んになる、僕は歴史や地理を調べたのは、みんなこの志を立る力になつたのだ「成程君は人とちがひ、文字のない所で本を讀のは僕らにやァわからない、何しろ、といひかける時、おもての方、急にがや〱といふ人聲「ヤァいつの間にかうす暗くなつた、モゥみんなが歸つて來た、ゆつくりめしでもくつてから、咄しをしやうと立上らんとするに「久ヤ久ヤ客衆かといひながら、こゝへ來る男久はむかへて「學校の友達で、東京から尋て來られました、いつも御咄しをいたします橋本と、つげてこなたをむき「ちゝですとかろくいふ、くれやらぬうすあかりに見れば、前の方ぬつぺりとはげて、坊主のやうなるぐわんぢよう作り、どことなくゆつたりした、六十前後の大の老人胸もあらはに、手をりのゆかたきて、雨ひざついて、時候のあいさつより、遠路のつかれをなぐさめ、悴がせわになりし禮などいふ、田舍者のならひ、念入てゝ幾度もかしらをさぐるに、橋本はたゞ同じやうに頭を下ぐるのみ、久は團扇手に取りてより來る藪蚊はらふてゐれば、老人は頭をなで、かうなるとあたまに蚊がとまつて、どうもなりませぬ、と笑ふに挨拶されて引退くと「若旦那、湯がわきやしたと作男らしき男、どうま聲にていへば、久橋本にすゝめて、久し振で、一所にはゐらう、僕は寄宿舍で君は通學、本郷通の錢湯で二度か三度一所にはいつた計だ、田舍風呂はせまくつてきたないぜ、とはいへど中は廣く湯かげんもよく水はかけ樋にどん〱と流れる心地よさ、頭などひやしてあがれば、この家の廣間にラムプ二ツともしてかまむしろ椽にしき、時候がらの岐阜提灯軒につるし膳を並びすゑたり、旅のゆかた脱て着がへをと取出したるサッパリしたる單衣にきかへ坐を占れば久が母といふがこゝらまれなる利發さうな顔付小がらに色あさくろく、鼻高く目元すゞしく、丸わげ小くゆふて、としは四十四五、くろつばきゆかたに茶色の帶ちやんとしめ、一禮のべし後はうちわに絶ず風を送る、はじめ二三度は辭退せしも聞であふぐに、物にかゝはらぬ橋本なすまゝにまかせておけば、父親はまた、むかしかたきにかたくるしく、紋付の絽の羽折わざ〱ひきかけて其座にならび久が弟榮次郎を引あはせて今年は雨すくなければ、山間の田地、此邊はすべて、秋のたのみあらざる事、此頃此邊にて新たに蠶飼立てたるも、いまだ其の方に熟せず、糸くりも太細ありて輸出品に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はならざる事、久が江戸にて修業し、學者になつて、近所の村々のものに尊敬され、某村の學校の教師迄がものとひに來るとの事、次男榮次郎は小學校を卒業したればこれも兄のごとく江戸へ出すべきか、又は沼津か靜岡の學校にて今一修業させて後になすべきか、兄にはかはりてませおれば、都下の惡習に染りやすからんかと、心もとなきなどおもふことゞも、打あけてはなしつゞけて田舍者のくどきをうるさくおもひ給ふべしといふ、口の下よりまたくりかへし同じやうな物語見かけによらぬ下戶と見えて家にかもせし村醸の味うすきに、はや顔のあかみそめぬ、橋本たゞ唯々ときゝゐしが、はなしのとぎれに、材木の事いひ出し海外輸出の利益など、ほのめかせど、一向合點のゆかぬやうすに、强てもいはず、そのまゝ退きて、久が部屋に一ツ蚊帳枕ならべて寢ぶりしが、なれぬ家とて短夜にも目さめやすく、そと雨戶引あけ見ればはや鶏の羽たゝき勇ましく、そこらにある庭下駄ひつかけて、朝日さし昇るまで、この家の所有らしき地田といはず畑といはず、めぐりくてかへり來れば、久は裏の井戶に口そゝぐところなり

この朝は何とかあいさつに來べき久が兩親、影も見せず、朝飯も部屋におくりて、久には一寸來よと下女もていひこしぬ、久はニコくうち笑てほどなく歸り來りし折、おもてさわがしくきこゆるに、窓から見れば小作人に打まじりて尻ひきからげて先たつは久が父、榮次郎をしたがへて畑へ出ぬ、納屋にむしろしきて、繭のまゝおろすにや女共と共に俵かひくしく、しめくくるは母、かゝる大家にかゝるありさま、東京の人の寢てくらす一生に引くらべては、氣の毒にもまた感心してながめいりぬ、

久はおもひ出しやうに、くたびれずはきのふも咄しつる親父にすゝめて、山林をかはしめし久野といふ人の許訪ふて見ずやといふ、何のくたびれはきのふ湯にて殘らずなりぬと直につれ立てその家をとへば、小さけれど門一ツかまへて淸らかなる住居、小座敷に朝顔うつしの油たんしきて、小窓の側に小机かまへ床には錢舟の草書一行のかけ軸なげしには三州の額字など、いかさま田舍にて小口きく人物と覺しく久が兩親が質朴には事かはれり、主人は年の頃四十前後持田持畑もあるべきに、自分には手をおろさゞるか、椽側にこし打かけ、小

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

萬年青の葉を筆もてあらひゐたり、久が入りくるに愛敬よく一禮して橋本を引合すれば喋々しく初對面の辭宜す、何となくコセ〳〵しておちつきなきふりあれど、はなしのすぢはよくとほりて、のみこみはやく見ゆ、橋本は久がいふ所はこゝなんめりとかの木材輸出のもくろみくはしくかたれば、膝のりいだしておもしろがり、御卓見〳〵と同じ言葉にいく度かほめて、をかしきまで漢語まじへて其贊成の意を表しぬ、きゝゐる久はふきださぬまでに笑をこらゆるに、久野はいよいよ眞面目に打かたらひ、是非とも一臂の力を盡し申べし明日はわが持林より今村が山をも案内して立木のさま見せ申さんなどいふ、橋本立歸れどその日も久が兩親もいそがはしくや、橋本の方へ顔をも出さず、翌日は朝早くかの久野の方へ赴きて、とも〳〵に山林を見物に出立たり、久　見慣たる山、見たくもなしと道に別れて家に歸れば母は待受「久やあの東京から來た人は、いつかへらるゝか、そなたは惣領の甚六だけありて、人をうたがはねば、だまされやすし、あれは大山師にちがひない、早く歸してしまひナ、おまへがあんな人につきあふと、ろくなことはないとおもつて、おとつさんもわしも、夜もろくに寢られない、あのさまをみよ、それほどのでかい事を

もくろむ人が、たつた一枚のゆかたに、こはれかゝつた皮ご、骨の一本折た編幅、とはマア脊戸の權太だつて、あれほどではない、今度内で山を買入たといふことを、きゝつけてそなたをだまし、又わしら二人もだまそうといふ、たくみに相違ない、去年の正右門さんの所で、東京の人だとかいふのが來て、田地の取引の事で大へんの金をかたられた、どうしてどうして、東京といふ所は、生馬の目でもぬくといふ連中の巣だもの、油斷は出來はしない、一年や二年つきあつたつて、人の氣心がわかるものか、何學問が出來る、學問が出來るものは又それだけにわる智恵がはしる、此間の晩もわしかあふひでやれば、よい氣になつて、おとつさんをだまかさうと、口にまかせてしやべつてゐた、おとつさんの御心よしでも、そこは年の効だ、かんついたと見えて、はなしをそらしてお出であつたからよかつた、こわいこと、手のひらへのせた金よむやうに、あの辨口でのべつけられては、大概のものはころりとゆくは、榮次郎も目つきがこはらしいなどゝいつてゐた、そなたはほんにお坊さんだよ、だまされてす、御稻荷樣のおつかはしめだよ、はやくかへしてしまはないと、なにをするかしれはしな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

い、と涙聲になつて疊たゝけば久は信友の事あしくいはれ、母ながらも少しくむッとせしが見る所せまければ疑ふこと多きは人のならひ、しかおもふも無理ならずとおもひかへして「きのふおつしやつたこともけふの御意見でよつく腑に落ました、あの人は學校におつた時、友達の人々の中にとりわけてせわになりましたから成丈愛想はつかしたくムりませぬ、ナニいふことをきくと、きかないはこつちの胸にあります、殊にわたしが部屋住で、何事か出來ませう、けれど御注意の所はどこまでも氣をつけますから御安心なされませとやさしくいへば、さうきいて少しは安心なれど、よくまた氣をつけて下され、こゝの家はおとつさんで十五代目、權現樣より古い家柄で伊豆では御代官の江川樣についての舊家名に疵のつかぬやう心かけて下され、といひすて手拭打かむりうら口の方へ出て行

久は部屋にかへり、兩親不承知にては、橋本が折角の頼にも應じがたし、わが家さへ率先して、橋本の爲にはからんには、自分持山はいふにおよばず、近き村々の山林もてるもの、みな力を併すへきに、いかゞはせんと腕ぐみして、ひとり默然となしゐる處へ、橋本は今日久野もろとも山へ行き當國の山林に富ることはかねて知るところなれど、實地を見ては又格別松杉の類はおろか、別して櫟の大木、支那の俗として孝道に厚く葬送の祝に物を吝まず、棺槨の材には第一と數る此櫟木、尤見込のある商品、彼國にては雲南金沙口を揚子江へおろし、筏に組みて千百里の水路、上海邊まで來たる後、船積して北方へ送る外、近頃際涯より出るもあれど、此亦海路を比較して、我より直航する方近し、いづれにしても天津へ直輸なさんには、利益を得んとは掌を指がごとしと悦び、勇み歸り來る、久を見より「君どうもうまいぜ一つ令父に願つてこの家の持山からといはれて久は氣の毒さうに「どうもおやぢが頑固でこまるがかの久野は、内では大信仰だから、あやつから說てもらふかともおもつてゐるとなげ首して答ふれば「なる程ちやァはなしが六ケ敷ナ、僕がこんな性だから信用されないのは無理はない、僕だつて無資本で、山こにしやうと人手間かけて來たのはたゞ、いよ〱といふ時に僕の手に購てもらふ約束が出來るか、出來ぬかをたしかめに來たのだから、今すぐに返答をきくにもおよばぬ、それまではあの久野に周旋をしてもらふ、やつは中々はなしが出來る、成程田舍ではまれもの、だらう

底にはいやな元素もあるやうだが、こつちで臍をかためてかゝればかへつてあゝいふやつが用にたりると氣にもかけぬありさまなり、

久野はまことと橋本の人物を見ぬきしにや、はた無暗とおだてられ乘氣になりしや頻りと周旋を受合ておのれ卒先して持山の木材切出し、今村は勿論、近村のものも說すゝめて下田港へきり出し船積せんまでは、わが一手にてはからふべしといふに、橋本は力を得て今村の事は久と、この男に打まかせて一ト先東京へ立戻り廣瀬牧塲へゆきて、委細を語れば、廣瀬も一方ならず悅び資本万端見込の通り貸渡さんと心易く諾ひぬ、折しも或貿易會社にて南洋通のため佃島にて打建たる帆前船三百噸許なるが、拂金の滯りの爲、手附ながれとなりて賣物となれるありしかば、いくらかやす直にかひ落して廣瀬が持船とし、此又貸渡しくれんとまでいはゝるに、益力を得、此度は洋服一揃へ出來合の似合しきを買ふて、身のふりを整へ、先度にかはる紳士出立、いさゝかの東京土産まで持て再び、今村方へいたれば、今村の兩親はいよ〳〵山師なり俄にかはるあのなりはと、稻穗はむ蝗よりおそろしがりて、久をせむ、久かれこれと辯護して、久野もろとも調和に手を盡す折から、橋本の手船下田へ着きしとの噂何事の手つゞきもかつてはなせしにつゆたがはず、殊に資本の金も餘りありて、立木のまゝに手附打て切出しに取かゝらせなどするさまに、今村の兩親も始めて悟り、かたき物はかへりて碎けやすくかれより其商業に組合んことを求め、己れが山の木材にて其の資本を助け、合資の商業を企つるにいたれば、橋本の人望益々高く商品の積入も意外にはかどり、久野には此地にて跡々の事すべて引受させ下田港に見送る諸人の祝ふ万歳の聲もろとも追風に帆をあげて船出せり

書架

蠶種製造論

一浩　勘　子

近時蠶業の著書無慮三百餘種に上る、此業初心者をして其撰擇に迷津せしむるに至れり、以て此事業の我輸出品として如何に奬勵の著大なるを知るに足らん。然れども蠶種製造の良著書に乏しきは吾人の遺憾とする所なり、頃者長野縣人相馬愛造君の、蠶種製造論なるもの、經濟雜誌社より出板せられたり、今回一卷を寄せらる、之を通讀するに、著者は繭採、種採の分業の主要なるを說く、良繭を得んには良種を撰擇せざるべからず、故に良蠶種を得んには、自から種蠶特別の飼養ありたるものを採撰すべきを論ず、而して通編要旨拾六章に成り、各章蠶種製造に關し其説質實懇篤なり。近時歐米農事の進歩は殊に、種苗の分業起り、之が

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

爲め熱心なる專門家の改良ありて今日の盛運を見る、獨り營業家のみ、國、理保操此業の爲め措て問はざらんや、例年五千萬圓の國産、若し夫れ精良好よりして二割の增收あれば、實に壹千萬圓の富を得べきなり、營業家一讀すべし。

片々

○學閥の打破、先輩學者何爲する者ぞ

我學界には洋行歸りの若者が俄かに博士となり、官立學校出身者が特權を有し有爲の青年が學位を崇拜する杯、不公平且つは慨然なるとども多々之れあるとなるが、取り分け爰に學閥を形造るに至りしこと、返へす〲も遺憾に思ふ所なり。近刊「日本人」之を論する痛快を極めたり。曰く、

而も學閥にある者、未た何等の精確觀察を成就せず、新著述を述說せず（小册子の著述はあれど）、世界の人文に何の寄附する所なく補益する所なきが上に、敢て其頭腦に新知識を容れんとする樣子もなく、學術上の應用をも爲し得ず、況んや學閥の弊、藩閥の弊の如く、亦た此間に養成されたる者にも其の惡化を波及し、此派のみを以て日本の學問界を占め盡し、之を容認するの結果自から貴顯的となり……余輩は學閥攻擊の喊聲は今より愈々益々四隅より蹶起して、動もすれば輙ち衆議院が帝國大學の經費を削除し、兆新事業を阻害せんとを恐る、余は學閥諸子の爲めに之を恐れず、日本人文を沮喪せんとを恐るゝと

更らに學閥諸子の地位を占有するの策を爲して曰く、

先づ請ふ其頭腦中に新知識を容れんとに勉めよ、新精確新觀察を成就し若くは諸子が力量を公示するに足るの新著述を述說せよ、油斷する勿れ、僭僞なるを勿れ、只管虛假なるを勿れ……且つ學閥以外の諸學校とも相聯絡して將くこれと共にし之と知識を交換し、孜々孳々、學士たるの本領を嚴守せば、世の學閥を厭嫌する者愈退却して、諸子の地位は安泰ならんと

又更らに理學者を警醒するの言、誠に適切なるものなり。要するに學閥にあるものを悉くエラシと思ふが已に世上の謬見なり、彼等果して何爲る者ぞ。

○小學校の洗濯染物科

富山縣下新川郡泊町育英尋常高等小學校に於ては學齡兒童中殊に女子就學者の數僅少にして男子の半數にだも達せざりしを町長大島直昇氏大に之を憂ひ廿五年十月新小學校令實施以來校長植木伊三郎氏と計りて漸次其の救濟の策を講し爾來着々步を進め女子裁縫科に洗濯染物の科を附設し大に就學兒童の增加を見るに至れり今其の槪況を左に揭ぐ

第一從來の裁縫科　同小學校に於ては從來裁縫の科ありしも授業時間一週總に三時乃至四時にして之を各日に分つときは一日一時間の配當なるを以て其の準備等の爲め消費せらるゝ時間を除けば實際授業の時間は平均三十分內外に過ぎず爲に一週三回或は四回の業を受くるも單に形式的の裁縫に流れ簡單なる衣服と雖數月の後に非されは之を完了すること能はず往々夏衣に用ゐんとするものも秋期に至らざれば用に適せざることあり殊に許多の日子中墻合を汚損毀損すること尠なからず是に於て父兄は實用の衣服を裁縫補綴せしむるを好まず或は單に雜巾のみを刺さしめ或は編物、押繪、巾着等實用に遠き裝飾品のみに從事せしむるに至り終に父兄をして學校に於て教を受けしむるよりも寧ろ變則なる針師匠に就きて實地練習を爲さしむるに若かずとの感を起さしむるに至れり

第二洗濯染物科の附設　女子の就學を進めんには實業上の知識技能を附與し父兄をして學校教育の必要を知らしむるに在り廿五年十月新小學校令實施以來町長は殊に意を此に注ぎ大に教則を改良し先づ實業科として裁縫を加へ簡易なる衣服の縫方裁方等を授け編物其の他時候流行に關するものは擯して之を止め專ら實用に適するもののみを選みて之を習熟せしめんとせしも中等以上の女兒は其の材料に不足なきも中等以下の女兒に至りては往々之が缺乏を告け空しく手を束ぬる者多きより裁縫科の附屬として洗濯染物の事をも併せて授くる事と爲し從來地方に行はるゝ地質色合等を損する如き不完全なる弊を改良し色素の性質等を識別して之を洗濯するの方法及び其の注意を授け或は之を染め直して他色に變し到底廢物に歸すべきものも色上げをなして他物に利用し或は地の褪色したるものは染め直して再地となす等の如き節約利用の方法を教へ生徒の衣服の垢汚したるものは自ら之を洗濯裁縫せしめ力めて女子實務上の智識と經驗とを與へ父兄をして大に學校入學の利益を悟らしめたり

第三學級の編成及時間の配當　從來學級の編成は男女を混合せしが特種の教課を授くるには不便なからざるを以て專修科に限りて男女を區別し女子の教育は

專ら女教員の擔任と爲し諸學科をして成るへく關聯せしめ裁縫井に洗濯染物科の教授は一週中一日に合せ修身科と共に終日之を教授することゝせり蓋し裁縫科の如きは女子先天の性質なるを以て終日其の業に從事するも毫も倦厭の念を生せさるのみならす其の間修身科として或は貞婦烈女の善行を說き或は家政に適切なる心得を聞かしめ座作の節進退の禮悉く實地に教授するを以て少しも喧擾雜沓の憂なく不知不識の間に婦德を涵養し其の益尠なからす兒童も亦其の課程を修むるを樂み終日孜々として之に從事するを以て從て衣服の裁縫補綴等從來に比すれは大に其の成功を速かにし未だ二三週を出てさるに已に完成の結果を見る是に於て女子就學の必要漸く父兄の認むる所となり入學を申出つるもの陸續として絕えす然るに町長は猶之か奬勵に怠らす大字每に自ら出張して父兄に懇諭せしより其の數頓に增加し學齡兒童男四百五十二名女四百四十三名中卒業退學者男百一名女三十一名を除き男三百五十一名女四百十二名の內就學兒童男二百七十名女二百六十八名と爲れり爾後益々其の督責を嚴にし一昨年七月に至り就學兒童の數學齡兒童百人に付男七十四人、三六、女六十三人、八三の比例と爲り大に舊來の面目を一新せり

此の如く就學の督責を嚴行せるを以て勢ひ長年女兒をも就學せしめさるへからさるに至りしも此の輩は已に家庭に於て父兄の職業を補助するの年齡なるか上に六七歲の稚兒と伍して學校に出てしむるは事情の免さゝる所なる以て之を斟りて彼の一週一日の裁縫科にのみ出席せしめ之を教授せしに亦好結果を奏し今日に至て益々隆盛に赴くと云ふ

時報

◎學校、教育

●明治女學校の卒業式　去る二十一日午後第六時を以て同校講堂に於て第七回卒業證書授與式を擧行したり來集者二百數十名にして執行せる順序並びに卒業生の姓名は左の如し

一歡迎の歌
一勅語捧讀(捧讀中一同起立)
一卒業式の歌
一文章(女流文學)　普通撰科卒業　藤島ユヤ
一唱歌(春のうた)
一文章(思のくさぐ\)　高等科卒業　藤戸クス
一唱歌(英語)
一文章(すみれに對して懷を述ぶ)　高等科卒業　松井セツ
一卒業の歌　卒業生　一同
一送別の辭　普通科生總代　松原テル
一同　高等科生總代　久保ハルヨ
一唱歌(春のめぐみ)　(鈴木ヨシ　染谷イ子)　伊藤マン　山口ヨシ
一送別の辭　卒業生會會員總代　竹内ウメ
一送別の歌　(高等科一年生　普通科三年生)
一卒業證書授與
一勸告　校長
一答辭告別　卒業生總代　佐藤スケ
一唱歌(うなゐ乙女)
一演說　本校評議員　島田三郎
一琴合奏　(琴　胡弓　琴)　吉富樂師　吉住樂師　染谷イ子
一祈禱

卒業生姓名　(イロハ順)

高等科(四名)
松井セツ　藤戸クス　齋藤ソユ
佐藤スケ

普通科(二十名)
春木ユキ　原イ子　原サワ
富井ミ子　渡邊モウ　高橋イト

中西アサ　中山ミツ　登散コト
大和田ムラ　大須賀キヨ　山口ヨシ
澤野テイ　濱谷タウ　三浦コウ
下平タケ　下山トメ　守山キン
千住イハ　鈴木ヨシ

撰　科（八名）

伊藤マン　染谷イチ　塚原フミ
松尾トラ　江　タエ　綾井コヒン
増山キク　藤島ユキ

合計三十二名

●京都府高等女學校　同校にては去る十四日卒業式を擧行したり、卒業生其他の人員は左の如しと、

本科　佐武みつ外廿九名、前科裁縫科　福島ふく外廿三名、明治專修科　井関よし外七名、練習科　四手井えい外八名、撰科進級生　數十名、

●照暗女學校の合併　京都川口居留地なる照暗女學校（米國傳道會社附屬）は曾て京都に移轉せん計畫ありしが都合に依り今回東京築地居留地の同社附屬立教女學校に合併することゝなり現在生徒四十餘名の内十五六人を選拔し去る十七日上京せしめたりと云ふ

●華族女學校幼稚園の開園　華族女學校幼稚園の設置に就て種々準備中の處今回全く整頓したるに付き本月廿四日より開園保育を初むる由にて昨今迄の入園者三十三名中華族の幼兒は十五名なりといふ尤も新築保育場は來る七月中に竣工する筈夫迄は同校内の教場を差繰り保育場に充つる都合にて新築落成の上は來る九月に開園式を執行する由

●島海女學校　神田駿河臺南甲賀町の同校にては去る十五日全科及び各級の卒業證書授與式を擧行したり

●師範學校女子部の養蠶　島根縣尋常師範學校にては現今蠶業の旺盛に係する所あり女子部生徒一同に蠶兒飼育法を教ゆるは卒業後に於て最も効益あるへしとて本月下旬より講堂に於同部て播立に着手し中村農學士を始め會監一同これが飼育に從事する筈にて本年は先づ六七千の蠶兒を飼育する豫定なりといふ

●私立裁縫校設置　久米北條郡大塚和村大字角石祖母佐藤完太郎妻佐具能と云へる人は裁縫教師田淵信頼氏に從ひ明治十九年一月裁縫科全課を卒業し其の後居宅に於て近隣の女子を集め教授をなし倦まず勉強なし居たりしが今般私立裁縫校を設け若資金不足を生ずるが如きとあれば私費を以ても其の費に當て女子を教授せんとの目論見にて目下其筋へ請願中なりと（岡山日報）

●神戸女子傳道學校　同校にては去る十四日卒業證書授與式を擧行したり卒業生氏名は左の如し

小寺てる子（備中笠岡）三宅きく子（伊豫宇和島）柴田哲子（讃岐）有馬うら子（四京）宗岡ふさ子（丹波第一）藤さり子（備前天城）宇野もと子（肥後八代）

●關西女子教育會景況（各地出席者姓名）

○（靜岡私立女學校監督委員）大野久三郎○（名古屋清流女學校）三枝光太郎○（同金城女學校）磯貝由太郎○（京都同志社女學校）松浦政泰　○岡田幸三郎○西山教充○竹内たけ○濱田ちき○（大阪梅花女學校）成瀬仁藏○金森通倫○新田茂吉○河野健作○西山明教○重村元次郎○増田つる○安藤たれ○山口しづ○コルビー○ケスー○（神戸女學院）渡邊つれ○宮川とし○早川三木枝○（松山女學校）ガニソン○増田いし○竹村かず○（岡山女學校）望月興三郎　○八牧鹿尾○（金澤女學校）木道熊次郎（船便なき為延着）○其他神戸大阪京都諸女學校の卒業生十數名○來二十八年京都に於て內國博覽會開會中全國女子教育大會を開くの儀は京都大阪協議して市立女學校と交渉することに決せり

○基督教主義女學校普通科課程表編成ノ件滿場一致にて可決し望月興三郎、成瀬仁藏、磯貝由太郎、松浦政泰、外一名（神戸與山の分にして未定）を委員とし課程表を編成して各校の參考に供することとせり

○教科書調査委員を設くるとも可決して書籍取寄せの便あるを以て梅花同志社兩女學校より各五名の委員を擧て之に調査を托することとなれり

○各校提出の討議題　討議の間に成瀬仁藏著（女子の教育）神戸幼稚園はう驪（新

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

教育)の講話あり又兩度懇談會を開き女子の長不長、基督教主義女學校と他の女學校との優劣、學校的女子教育の失敗、束髮の利害等に就て各自胸襟を開て放談し列席の女生は餘程興味を感せられしやに見受けたり

○土曜(七日)の午後は一同相携へて櫻の宮東岸春風温なる處に親睦會を開き一帶の櫻雲万重の心且談し且笑ふて觀を盡したり

○前號の女學雜誌々上の「關西女子教育會討議」と題する中少々誤謬あれは正す

○基督教主義女學校普通科課科表編成件これは基督教主義の五字に重きを置きしにあらず唯關西女子教育會が基督教主義女學校なるが故にかく題せしのみ然し記者の所謂「人」として女子を教ゆる學校と方今の女藝の必要よりして教するとは自から共趣を異にする所あるべし

○聖書讀書教授の順序　讀の字は諸の字の誤なり即福音書は何書を先とすべき書輸は何書を後にすへき等の問題なり

○神學者に用ゐしむる聖書の良書及教授法　此神の字は初の字の誤なり(松浦政泰氏報)

●廣島英和女學校　去卅一日卒業式執行仕來賓も生徒父兄を合せて百余名有之候當日證書授與致候は

(全科卒業)錦織ユキ、(本科卒業)岡ヨシ、芝ヘルエ、時澤マサ、平佐コトロ、岡ヒデ、猶ほ試驗中途にて病氣發し中絶し上本學年初め臨時試驗に及第せし者(本科卒業)宮崎シゲル、本期卒業は前七名に御座候猶ほ本校及附屬小學科は他に全程度の學校あるため新入者も充分ならざるも幼稚園に至りては確實なる勝利に御座候偕行社附屬の幼稚園もあり師團長の干涉少なからぬも滿員の上常に缺員の生するを待ち居る志願者絶へざる位に御座候(栗屋七郎氏報)

◎片々

●第二回女子夏期學校　本年も亦た九月初ツ方より横濱に於て開かるべき筈なるが、總轄委員矢嶋かぢ子、稻垣末子、鷲本かし子を初とし、京濱間各女學校より推薦せし各二名宛の委員と共に本日女子學院に於て協議會あるべしと云ふ。

●前橋の有志者は　岡山孤兒院、那須野曉星園の爲めに來る五日に音樂會を開かるべしとぞ

●王子孤女學院の困難　を傳聞し大坂より三十左右の婦人夜の物、鰹節、蠟燭、飯米などを用意して、突然上京來助せられ、かつて其名を言はずして熱賀に助け居らるるとぞ

●淺井柞女子　は大坂梅花女學校の取締たられしが、此度び同地の關西女學校に轉ぜられたる由

●狄野吟子　は我國近世に於ける最初の女醫なり、是迄で明治女學校の校醫として校内に住居せられしが、其人四方之善氏數年前より着手せられたる、北海道開拓事業の進歩の爲めに、此度已むを得ず校を出で、北海の利別原野に移住せられたり。因みに云ふ、同女史が起草にかゝる日本女醫の過去現在及ビ將來の長文章は、曾て女學雜誌にも掲載せられしが、近頃ろホーイ氏編輯のジアパン、エバンゼリストに段々譯載せらるるを見るなり

●ジャパン、エバンゼリスト　は今后每號に「日本の婦女子」なる一欄四五頁の部を設けて、我國女界に於ける近況を報道評論すべしとぞ。

●函館遺愛女學校　にては去四日第四回の卒業を執行したる由

●女子高等師範學校規定　は遠からず改正せらるべし改正の要旨は高等師範學校規定と略均しかるべしと云ふ

●女教師の再來　ミセスエドモンズは一時歸英されしが去る六日大坂に着し直に福山に赴任せられたる由

●發明家の刻苦其女を沽んとす　山形市銅町に住する大工職本間助八といふは手際も相應の職人にて殊に化學の心掛深く以前山形縣鶴岡に住居の折同地の金峯山より產出する鑛石の內或る一種を製すれば立派なる「ゴス」に成べしとの考案より本業をもなさず年中一室に閉居して此研究にのみ從事し一家の生計を顧みざる爲め往々日々の炊烟を絶つ事ありしより妻は之れを苦慮して三年以前三人の小兒を遺して不歸の旅路に就きぬ助八も大に落膽し一時は此研究を廢止し本業に身を入れしかど何分斷念しがたく昨年の夏頃より又々此研究を繼續しけるに數年の刻苦其効空しからず今は當初の目的遂行の場合となりしかば此の上は充分の鑛石を購求し製造せんと思ひ居るも何分資本に缺乏を告げ何とも爲し難きより時の要には鼻をも削ぐとの諺の如く長女ツテ(十七)を川竹の流れに沈めその身代を資本に充てんとせしをツテは親の爲なれば如何なる奉公をも辭せざれど娼妓勤めのみは免されたしと訖ち去四日同地の警察署に出で父へ說諭願をなしたりと。新朝野新聞に見ゆ

●日本小兒教育研究會　茨城縣の人にて渡邊嘉重氏と云へるが現時我邦に行はれつゝある教授法管理法等多くは歐米に例へたるものにて殊に幼稚園の組織に於て缺點少なからずと感じ表題の如き研究會を設立して廣く會員を募り每月雜誌を發行して會員に報し又集會を催ふして小兒研究上の談話演說等を爲す由

●女子の相撲に就て　女子の相撲は是まで出願許可の手續を要し來りし處仙臺市役所にては當然相撲すべき権を有する者は自今屆出てに止るとに改められたりといふ

●鳥取師範學校生徒の食事　鳥取縣會にては本年度より生徒の食費を減じて一人六錢となせしより同校にては炊事の方法を定め經濟を主として配當を爲したる由

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にて鳥取教育雜誌に記載したるものを見るに左の如し

毎一人一日六錢米穀醬油味噌薪炭漬物の費用及び炊夫の雇賃等を除けば剰す處魚菜代僅に五十七錢あるのみ之を定員八十名に課して毎一人僅に七厘二毛尚細かに之を云へば朝食の魚菜代は僅に十錢一厘之を定員に除して一厘三毛午食の魚菜代は僅に二十四錢之を定員に除して三厘晩食魚菜代は僅に二十三錢八厘之を定員に除して二厘九毛餘又一週間の炊事表を揭ぐれば

	朝食	午食	晩食
十五日	きら汁	大根の味噌煮	菜の煮物
十六日	大根の漬物	煮物千切大根	大根汁
十七日	大根汁	菜	きらす
十八日	大根の漬物	大根煮物	菜
十九日	大根の汁	煮物千切大根	菜からしあゑ物
二十日	きらす汁	煮物大根	大根汁
廿一日	大根の漬物	鹽鰯二尾	大根汁

因に記す高知縣師範學校生徒の賄料は一人一日八錢一厘なりしを今回一切自炊となし一日七錢二厘と定めたる由

●眞宗婦人教會一周年會　去る十七日築地本願寺の眞宗婦人教會の設立一周年に付き同日一周年會を開き會務の報告及び島地默雷師其他婦人に關する演說あり出席會員八百餘名ありし由

●松山婦人會　宮城縣志田郡松山に於ける同會は明治二十二年に組織せられ現今は頗る盛大なるものにして談話の餘暇を以て裁縫編物等の賃金を貯蓄せしに今や實に四百餘圓に達し將來多望の會合なりと云ふ

●高月婦人協會　備前國赤坂郡東西高月村の婦人等相謀して今回高月婦人協會なる者を設立したる由其の主意は互に厚誼親愛を旨とし虚儀を廢し諸事質實を要しと且讀師に囑托して修身育兒衞生家政等總て婦人須要の講話を聽くに有といふ

●矯風會　新潟縣北蒲原郡菅谷村大字下中山にては宮下斧三氏發企と爲り風俗を矯正し學術を研究するの目的にて此種同會を設置せるに陸續賛成者ありて目下會員廿餘名に達しをりとぞ

孤兒の友

王子孤女學院に寄附

一金一圓	松村柳子
一金五十錢	今村來子
一金五十錢	三宅田龜子
一金壹圓	高　眞二
一金五十錢	山田郁子
一金五十錢	高　眞子

●正誤　前號女學雜誌要目中「赤十社」は「赤十字社」の誤、同二十二頁上段「遇亦」とあるは「片々」の誤植なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

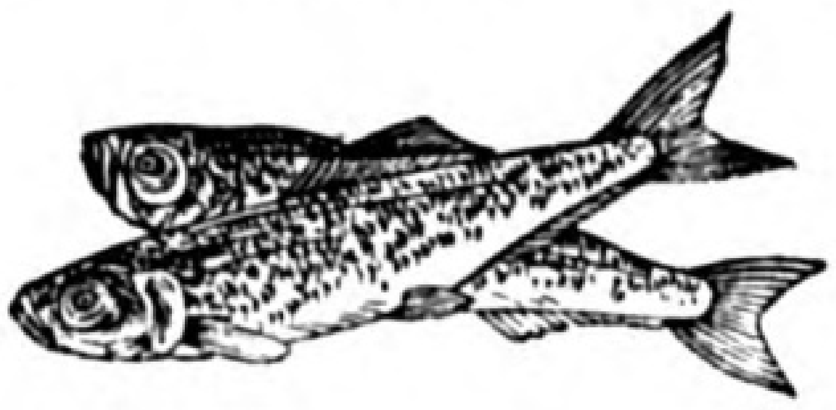
花の屋胡蝶大著

家事經濟の要務
素人料理 **年中惣菜の仕方** 全
細君日用の錦囊

夫れ割烹は女學の一科目にして實際に必用の業也而して年中三百六十日毎日惣菜の仕方に困るは細君の常也此書は儉約を主として四季の惣菜と爲すべき者を多く集め間〻客を饗する料理を加へ之を汁類、羮物、したし物、あへ物、炙物、生酢、鍋物、天麩羅、漬物、飯類の十類に分ち類毎に又之を春夏秋冬及び四季通用の五部に分ちて一一其切方よりしたぢの加減羮方の手順に至るまで詳細に記載し之を總がな附にし加ふるに圖解を以てして極めて深切に著述したる新機軸の書也苟も世帶を持つ者は速に一本を購ひ常に座右に置けば啻に參觀の便利のみならず家政上裨益あること亦小少に非ざる也

（附言）嫁入せる女子には稽古がてら此書に就きて實驗せしむれば後日の爲めに大に益あるべし

實價貳拾五錢
郵稅六錢



發行所 名古屋本町通 靜觀堂
賣捌所 東京神田表神保町 鐵砲町二丁目 女學雜誌社書店

文學界

第十六號目次　四月三十日發兌

口なしの花……雪
月……藤
志らぬ……癸
花十五句……酒
草堂書影（其一）……禿
人心の幻境を論す
花ごもり……一
流水日記……孤
音樂學校演奏會……柳
機聲燈影圖……寧
時文
綠堂野史。美術學校展覽會。馬鹿趣高。新刊雜誌。塵影。

影村花竹木　葉蝶村齋

一冊六錢、市外六錢五厘

發行所 東京下谷三輪町八十九番地 文學界雜誌社
發賣所 女學雜誌社書店

日本女學

編輯者　村木經策

新書廣告

書中記する所多くは一度び女學雜誌上に世に公けにしたるものなれども今や時の趨勢に迫まられ更めて梓に上ぼせたるものなり

目錄

各女學校長及び父兄諸君に警告す
女子敎育の要旨
敎育の流行
眞正の女子敎育
英語敎育
地方々學校
宣敎師派女學校
職業敎育
校舍の建築

一冊五錢　郵稅二錢

發賣所
女學雜誌社
書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小此木信一郎 布川靜淵 合著

俳諧史傳

和裝美本
定價二十錢
郵稅四錢

五月一日發賣

◉小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』製本既成す。嘗て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

◉思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美妙なる想念を蕩漾せしめ、豪宕なる漢詩、優婉なる和歌以外、別に、幽玄、閑寂、悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

◉俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる壇林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、正風俳諧となり、平民的敍情短歌の面目を構成す。

◉其源流に遡り、其發達を討ね、其推移を敍し、其變遷を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然として讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

◉これを分てば俳人個々の傳記となり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を横溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽遠なる秘奧に冥合せしむるに足らむ。

◉若しそれ、一字苟もせす、一筆輕々に下さず、言々證あり、句々據るところあり、而も文章、平易簡明、敍記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむとするの士、一本を座右に備へば、得るところ豈に鮮少ならむや。

發行所

東京神田表神保町六番地
女學雜誌社書店

本校

四月學年終結に付各級へ新入を許す規則所望の人は郵券二錢封入御申越あれ

明治廿七年四月

東京市麹町區下六番町六番地
明治女學校

大坂道修町二丁目

●生徒各級欠員募集

關西女子高等學校

○申込四月十日迄○寄宿ヲ諾ス○內外教員十四名○學科ノ外活花茶式琴○裁縫ハ最モ速成ニ注意ス○四月十日迄ノ所遠國ヨリ申込非常ニ多ク其便利ヲ謀リ延期候志望者ハ至急申込アリタシ

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓八十錢	金二圓八十六錢

發賣所

東京市神田區表神保町六番地
女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日內務省許可
明治廿七年四月廿七日印刷
明治廿七年四月廿八日發行

發行兼編輯者 東京市麹町區下六番町六番地 巖本善治
全 牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地
印刷者 根岸高光
東京北豐島郡王子村下十條八百五十一番地
發行所 女學雜誌社
全 牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）